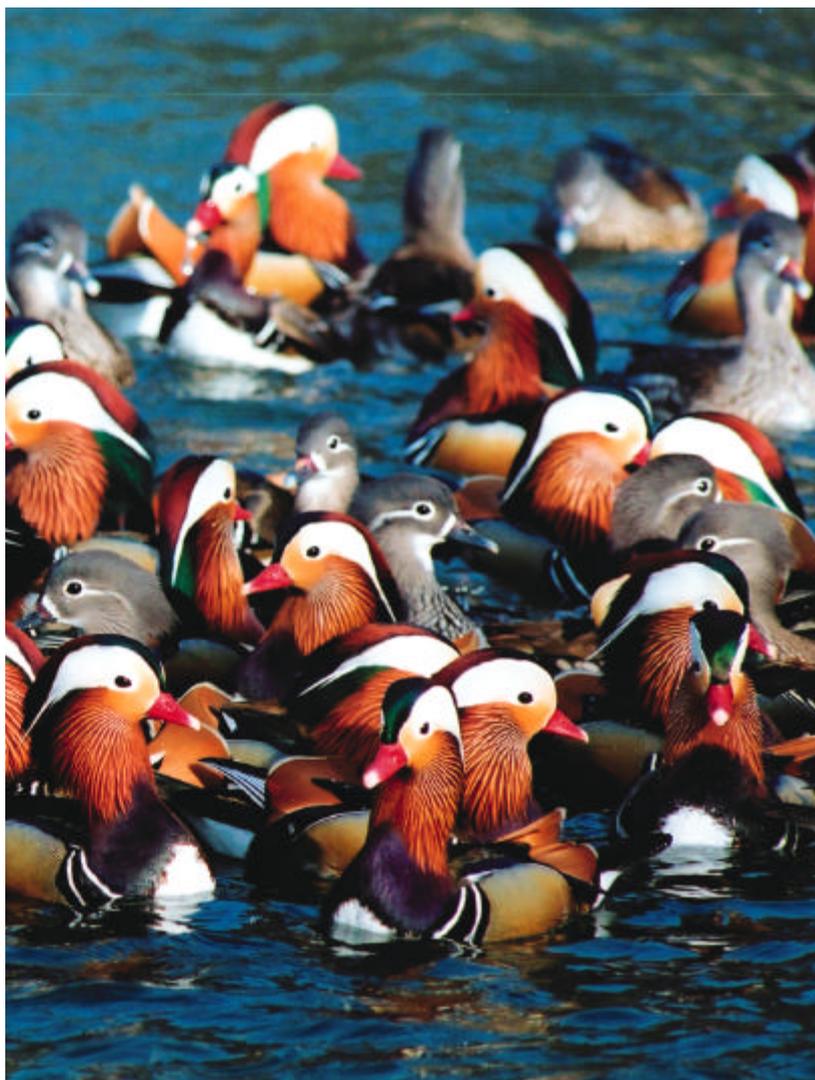


オシドリ

間近で見る美しい姿に思わず歓声を上げる来観者たち。ときには10ヵ先まで近づいてくることもあります。昨シーズンの来観者数は1万7500人を超え、オシドリ観察は秋から春先にかけて人気のスポットになっています。観察小屋は、JR伯備線根雨駅から徒歩5分の日野川沿いにあります。



秋から春先まで多くのオシドリが飛来する

オシドリ観察小屋

- 場所 鳥取県日野町根雨（日野川沿い）
JR根雨駅から徒歩5分
国道181号線近く
- 期間 11月～3月（年中無休）
- 時間 朝方～夕方
- 問合せ 日野町役場企画振興課
電話 0859-72-0332

オシドリに会える観察小屋
JR根雨駅から徒歩5分

水辺で赤、オレンジ、紫、緑の鮮やかなオシドリたちが、すごい、こんなに近くで見れて感動。思わず歓声を上げてしまつて来観者。カメラマンは、シャッターチャンス待ち続け、その一瞬に集中しシャッターを切り続ける姿があります。

警戒心の強いオシドリを間近で見ることができ「オシドリ観察小屋」は、JR伯備線根雨駅から徒歩5分の距離にある日野川沿いにあります。飛来数とともにシーズン中に訪れる人も年々増え、昨



観察小屋にはスコープなども用意され対岸のオシドリも見れる



オシドリを見に多く人が訪れる観察小屋



頭本直崇さん(下黒坂) 左
 稲田修士さん(根雨) 中
 田貝心平さん(津地) 右

頭本 飛び立つ姿は感動。朝の観察が特におすすめです。

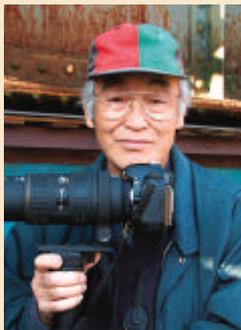
稲田 友だちに絵八ガキを見せて自慢しました。

田貝 色鮮やかで美しく、心がいやされます。



スコープをのぞくと
 佐々木悠花さん(舟場)

今回で2回目です。スコープをのぞいて見たら、オレンジ、緑、赤などすてきな色の羽をしていました。カラフルな服を着ているようできれいです。また見に来たいと思います。



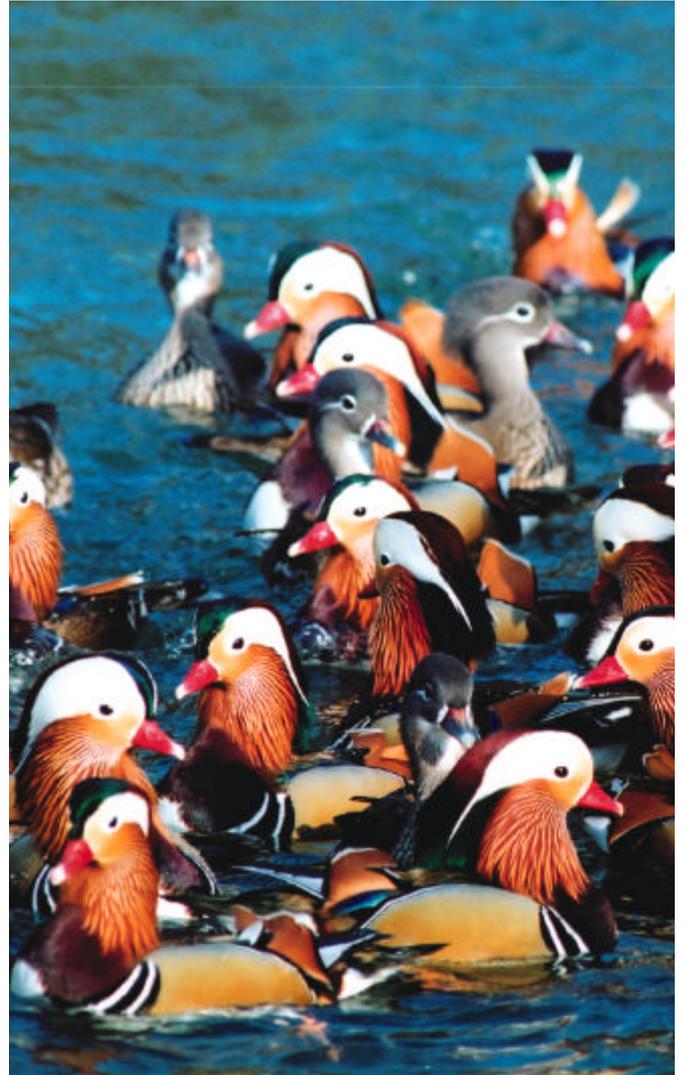
シャッターチャンス
 池田一男さん(岡山県倉敷市)

10年前からシーズンになると毎週のように来て撮影しています。美しく様々な表情を見せてくれるオシドリは、何回シャッターを切っても飽きません。清流の雰囲気も最高です。



ドングリ持参で見学に
 藤本文正さん・政江さん(倉吉市)

昨年から1度来て見たいと思っていました。オシドリは美しいとしか表現できません。また、ていねいに案内してくれる人にも感激です。今日はドングリを持ってきました。



シーズンはオシドリが921羽、来観者は1万7545人を数えました。
 北海道から沖縄まで全国各地から訪れるその人数は、町民のおそよ4倍にあたります。オシドリが飛来する秋から春にかけて人気のスポットになっています。
 飛来する11月からオープン北帰行を始める3月末まで
 観察小屋は、JR伯備線の鉄橋下にあり、広さは約16平

方メートルで1度に20人程度が入れます。

オシドリを支援する「オシドリグループ」が古い木材を利用して建てました。

平成12年にまちの補助を受けて建て直す予定でしたが、その年10月に発生した鳥取県西部地震の影響で着工が延期1か月後から始まるシーズンに何とか間に合わせようと、ボランティア有志と力を合わせ、自分たちで改修しました。

小屋の中には、直径20センチほどのぞき窓が開けてあり、そこからオシドリが見れます。スコープ(望遠鏡)なども用意してあるので対岸にいるオシドリを見ることができ、ときには10メートル近くまで寄って来ることもあり、人々を喜ばせます。

また、小屋の中には、ここで撮影したカメラマンたちが送ってきたオシドリの写真、広がる交流の品々、オシドリに関する資料などが飾ってあります。

観察シーズンは、飛来する11月から北帰行する3月末まで。特に条件が良いとされるのは、曇や雨、雪など天候が悪いときで、時間帯は早朝が夕方がいいようです。

生態を知る

水辺で寄り添い合うオシドリたち。オシドリはどこから来て、どこへ飛び立つのか。その知られざる生態の研究を重ねる「日本野鳥の会鳥取県支部顧問」細谷賢明さん（気高町）に話を聞きました。

アジア東部に分布

秋に飛来し春に再び北へ

オシドリは主にアジア東部に分布し、ロシア（シベリア、サハリンなど）、中国東北部、朝鮮半島北部、日本などで繁殖。秋になると西日本や朝鮮半島南部、中国南部などに渡来します。

北海道から沖縄まで生息、繁殖を記録し、国内で越冬する数はおよそ3万5000羽。鳥取県内には約2000羽が

飛来すると推定されます。

鳥取県内でも少数の留鳥もいますが、多くは北日本からの漂鳥、シベリア東南部など大陸から渡って来た冬鳥の3種類と考えられます。秋にやって来た鳥たちは県内で越冬し、春になると再び北の方へ帰っていきます。

美しい羽を持つオスと

全身が灰褐色の地味なメス

体長は41センチから47センチで翼

を広げると68センチから70センチ。カモ類の中では小型です。

オスは、後頭部に伸びた紅色から青紫色に変わる冠羽、首に栗色のひげ羽、腰に垂直に立った赤褐色のいちよう羽が特徴です。6月ごろになると換羽羽が生え換わる（こと）し、メスと同じような地味な羽色になりますが、10月ごろに再び換羽し、美しい羽色になります。

メスは全身が暗い灰褐色で、胸、脇、腹にかけて灰白色の大小の斑紋が散在。目の周りから後方にかけて白いアイラインがあるのが特徴です。メスも8月ごろに換羽しますが、色はほとんど変わりません。鳴き声は、オスが小さな声で「ウブ」「ツイブ」。メスは「クワツ」と甲高く鳴きます。



細谷賢明さん（気高町）

ほそや・けんめい
県内オシドリ研究の第1人者。日本野鳥の会鳥取県支部顧問。日本オシドリの会幹事。自宅近くの糸祿池（鹿野町）でオシドリ観察を始め約40年。

オスは羽を広げ求愛ポーズ

オシドリの多くは、10月ごろになると北の地方から飛来。やがてオスはメスの前で美しい冬羽を広げ求愛を表現。メスはその中から気に入った相



日野川で育ったヒナたち。母親といっしょに遊泳





写真 = 左がオスで右がメス 学名 = *Aix galericulata* 分類 = カモ目カモ科 英名 = Mandarin Duck

手を選びつがいになります。4月から6月になるとメスは産卵から抱卵。水辺に近い木の樹洞などに巣を作るといふ変わった生態を持ちます。巣には外からの材料を入らず、自分の羽毛だけで作ります。卵は鶏卵よりもやや小さく、一腹の産卵で平均10個ほど産み、約30日間でふ化します。

仲が良い代名詞のオシドリ 実際は違った一面も見せる

オスは、メスが子育てに専念するころ数羽の群れで別行動することが多く、求愛時期のようにつがいでも寄り添うような行動をしなくなります。

古くから「おしどり夫婦」「鴛鴦の契り」などの例えがあります。オシドリは姿が美しいだけでなく、寄り添い合うことが目立つことから、仲が良いことの代名詞に使われていますが、実際の生態は違った一面も見せます。

警戒心が強く臆病な鳥 好物のドングリは丸飲み

オシドリは、平地から標高の高い山地の湖、池、溪流などに生息。とても警戒心が強

く、昼間は枝が茂った薄暗い場所で見られるようにして休むことが多く見られます。エサを食べに出てくるのは夕方から明け方。夜は外敵から身を守るため木の枝の上に止まって寝ます。

食べ物季節によって違いますが、若葉、草の実、稲、ドングリなどを好んで食べます。実の硬いドングリですが、皮ごと丸飲みしてしまいます。また、小魚や小動物なども食べるということが確認されています。

絶滅のおそれがあり レッドブックに選定される

オシドリは、1925年に狩猟鳥から外され、カモ類の中では最初に狩猟が禁じられました。鳥取県では県の鳥に指定されるとともに、絶滅のおそれのある野生動物を記載した「レッドデータブック」とつとりに「準絶滅危惧（生息状況条件の変化によっては絶滅危惧として上位ランクへ）に選定されています。

細谷さんは「環境開発が進み、エサとなる木が減っている。鳥と人間がバランスを保ちながら暮らせる環境づくりが必要」と話します。

支える人々

地道に活動を続けるひとりの姿に心が動く。同じ思いを持った地域の人たちが集まり「オシドリグループ」が誕生しました。グループの行政に頼らない自主的な活動と努力が人々の心に響き、交流・支援の輪が広がっています。飛来してくるオシドリ、観察に訪れる人々のために裏で支える人々がいます。

ひとりの活動が心を動かす 地域の仲間が集まる

日野川で、えさをまき続ける池岡幸三さん(舟場)の背中。地道に活動する姿が人々の心を動かしました。オシドリの保護活動に協力したい。集まったのは、同じ思いを持つ地域の仲間たち。平成7年に「日野町オシドリグループ」が誕生しました。

グループ(池岡幸三代表、計5人)のメンバーは、えさ集め、観察小屋の管理運営、観察に訪れる人々の案内役をかう。そうした活動も10年になりました。

その間、鳥と人が共存できる関係づくりを目指し、オシドリが警戒しないよう自分たちで観察小屋を建設。町内にドングリが実る樹木の苗を植えたり、河川清掃など環境整

備も行いました。また、オシドリのことを理解してほしいと積極的に情報発信もしています。

観察に訪れた人を迎える オシドリ案内人

美しいオシドリやグループの活動が報道されると、まちは「オシドリの里」として有名になり、全国各地から多くの人々が訪れるようになりました。その人々を温かく迎えているのが、オシドリグループや地域の人がボランティアでガイドする「オシドリ案内人」です。

忙しい日は、朝から晩まで人の流れが途切れることなく続きます。1日500人が訪



来観者を誘導する案内人。親切な対応が慕われる

オシドリの情報が満載
オシドリグループホームページ
検索 オシドリーオシドリの住む町へ
<http://www.5.enjoy.ne.jp/~oshidori>



オシドリグループを支援
木島 泰さん(根雨)

少しでも協力できたらと思い、休日に案内人をしています。活動や人との出会いは、自分を成長させてくれます。これからも交流や支援の輪が広がっていくことを願っています。



団体客が来るといことで、この日は多くの案内人が集まった



宇部野鳥保護の会会長
宗本正行さん(山口県宇部市)

このすばらしい環境は、グループが長年努力されてきた成果だと思えます。地域全体で取り組む姿勢もすばらしい。このまちは環境や人づくりがすすんでいると感心します。

れたこともありです。しかし「建物に人がいなければつまらない。多くの人にオシドリの魅力を伝えたいから」と案内人は苦にしません。3年前から案内人をもって出る音田松枝さん(根雨)は「観察小屋では、多くの人との出会いがあり、皆さんとおしゃべりしながら楽しい時間を過ごしています。まちの観光案内をしてあげると喜ばれます」と話します。

場所が分かりやすいようにと、のぼり旗を立てるオシドリグループのメンバー



休日返上の案内人
その温かさに人々は感激

観察シーズンの11月から3月下旬まで、案内人は休日返上です。主に5人程度でスケジュールを組み、交代しながら案内しています。休日になると大型バスなどでやって来る団体もいます。そのときは地域の人に協力を呼びかけて対応しています。案内人は、オシドリの生態や地域の観光案内などについて説明。親切な対応は、オ



シドリの美しさ以上に人の心にやすらぎを与えます。山口県宇部市の田中潤子さんは「人をもてなしてくれる温かさが、また来たいという気持ちになる。地域の協力体制も素晴らしいです」。米子市の小坂智さんは「スコープの位置をすぐに見れるようにしてあるんです。その細やかな使いに感激です。初めてなので見るだけでは分からないことがあったので、

オシドリは人をつなぐ天使
広がる交流の輪

観察小屋にある記帳簿には、美しさのほかに「親切な案内人に会えてよかった」と書かれています。その言葉どおり、グループ事務局の森田順子さん(根雨)の元には感謝や激励の手紙が届きます。森田さんは「人が感動を伝え、それを聞いた人がやって来る。オシドリは人と人をつなぐ天使です」と言い、どんなに忙しくても1通ずつ必ず返事を書きます。

ていねいな説明は最高でした」と話します。

ドングリやくす米などオシドリのえさは、全国各地から年間700件以上届きます。「毎年忘れずに送ってくれる人がいます。遠く離れていても思ってくれる。うれしいことです」と満面の笑みで話す森田さん。

今までグループが取り組んできた足跡、送られてきた手紙や写真などはきちんと整理され、その冊数は50冊以上。すべてが大切な宝物です。